

vol.15

選書者：太田悠介

(神戸市外国語大学総合文化コース准教授)

●『私たちはどんな世界を生きているか』

著者：西谷修

フランス思想を背景として、戦争論とアメリカ論を中心に独自の哲学を展開してきた著者が、平易な言葉で現代世界を論じる一冊。約 200 年の西洋近代と日本の歴史を振り返り、現代を生きる個人がどのような世界によって造形されているのかという問いが考察される。著者は特にグローバル市場経済に厳しい評価を下す。市場は、本来は多面的であるはずの人間をホモ・エコノミクスへと矮小化するからだ。ホモ・エコノミクスが競う唯一のアリーナとなった市場では、人間の尊厳も平等も、値段のつかない不用品である。デジタル・テクノロジーの浸透によって、市場は人間の実相からさらに離れ、ヴァーチャル化しつつある。著者は本書の末尾で、「フィジカルなもの」の大切さを説く。「物質的なもの」、あるいは「身体的なもの」とも訳せるこの語は示唆に富む。無尽蔵の資源であるかのように収奪されてきた地球環境もまた、「フィジカルなもの」であるだろう。

●『スピノザ全集Ⅳ 知性改善論 政治論 ヘブライ語文法綱要』

著者：スピノザ, 編集：上野修・鈴木泉

17 世紀の哲学者スピノザの『政治論』では、統治者の数が政治を決定する。一人による政治は君主制、少数者による政治は貴族制、そして民衆による政治が民主制である。スピノザは政治と力を同一視するから、民衆の力が結合した民主制はもっとも強固であるはずだ。しかし、民主制の章はスピノザの死によって書き上がらなかった。この未完の民主制をめぐっては、二つの解釈がある。第一に、民主制では民衆の数がさらに増え、為政者により大きな圧力が加わる結果、さらなる「民主主義化」が進むとする解釈である。第二に、民主制の為政者は民衆自身なのだから、民主制は互いへの恐怖が蔓延した社会となるという解釈である。第一の解釈からは直接民主制と社会運動の重要性が導かれるのに対し、第二の解釈ではポピュリズムやレイシズムといった民主主義の危機に光が当たる。思想史研究が時代を超えてアクチュアリティを持つことを教えてくれる著作。

●『地球に降り立つ-----新気候体制を生き抜くための政治』

著者：ブルーノ（ブリュノ）・ラトゥール, 訳・解題：川村久美子

ラトゥール（1947-2022）のエコロジー論を代表する著書。現代では「地球を守ろう」という意識は広がったものの、このスローガンがあまりに茫漠として曖昧なために、私たちは事態の深刻さを掴み損ねたり、行動を先延ばししたりすることがある。だが、「自分のテリトリーを守れ」と言われれば、目の色が変わらないだろうか。本書は空気、海洋、気象、動植物といった自然環境が、人間の生活の安定した基盤だった時代が終わり、人間を脅かす存在となりつつある現状を「新気候体制」と名づける。人間が生息できる空間は、大気と大地のあいだにある、わずか数キロの薄い生命の皮膜の内部だ。本書は、グローバリゼーションの源にある球体としての「地球（グローブ）」という概念を退け、「大地（テレストリアル）」という新たな概念を導入することで、現代人が自然環境をまさに「自分のテリトリー」であるかのように切実に感じる手がかりを与えてくれる。

●『メタモルフォーゼの哲学』

著者：エマヌエーレ・コッチャ, 訳：松葉類・宇佐美達朗

『植物の生の哲学』で知られるコッチャ（1976-）は、農業学校を経て、人間以外の生物をめぐる思索を深める哲学者である。タイトルの「メタモルフォーゼ」は「変身」や「変貌」を意味する。蝶を例にとれば、蝶はまず「消化のための巨大な管」であるイモムシとして生まれる。蛹になると、一度完全に液状化してかつての姿を失う。最後に「性行為のための飛翔機構」としての蝶に変わる。人間の生の過程はイモムシと比べればたしかに外見の変化に乏しいが、人間も自らの生をその度ごとに作り上げ、また解体するという生のメタモルフォーゼをイモムシと共有する。本書では姿かたちを変えるもの、また移り変わるものとしての「生」が繰り返し論じられる。読者は植物や昆虫の多様な生を記すコッチャの思索を辿ることで、人間の生の特権性を解体する脱人間中心主義、そして人間と人間以外の生物の関わりを捉えるマルチ・スピーシーズ哲学の世界へと導かれてゆく。

●『人種・国民・階級——「民族」という曖昧なアイデンティティ』

著者：エティエンヌ・バリバル、イマニュエル・ウォーラーステイン，訳：若森章孝・岡田光正・須田文明・奥西達也

ラトゥールやコッチャのように、自然科学の知見を取り入れた人文学のエコロジー論の充実が目覚ましい。そこでは「自然」対「人間」という構図が集中的に分析されるのだが、他方で、人間社会の内部にある暴力や分断の分析がなおざりにされる危険も指摘されている。『人種・国民・階級』は、バリバル（フランスの哲学者）とウォーラーステイン（アメリカの社会学者）が、各々の視点からポスト冷戦時代のレイシズムの激化を捉えた著作である。マイノリティの居住地近くに環境汚染と健康被害をもたらす施設が建設されるような事態は、近年では「環境型レイシズム」と呼ばれる。エコロジーの危機の解決に、近未来の人類の持続可能性が懸かっているのは確かだ。だが、人類という理念が、恵まれた一部の人々の独占物とはならず、広く人々の行動を促す力を持つためには、すでに生存を脅かされている人々の苦境をまず解決することから始めなければならないはずだ。